

【十八禁シヨタ小説】

はるゝそめて

はるゝそめて

【十八禁シヨタ小説】

はるゝそめて

はるゝそめて

『今度の当主は偉くひ弱そうだの？十五と言うが乳飲み子にし
か見えぬわ』

俺と甚三の馴れ初めは、甚三の天をも恐れぬド失礼な台詞で始
まった。まあコイツが天を恐れる必要なんて無いよな。何しろ神
様みたいなものなんだから。

「遅いぞ、祐」

……あのー、もしもし？夜の八時と言えば凡その世間様はまだ活動中なんでありまして、俺にした所でまだ一応予定ってもんがあるんですが……と言うだけ無駄なんだって事は付き合い五年目にして把握済み。布団の上に薄い襦袢一枚で待機されてる方には甚三の用件の方が優先事項なんだから仕方が無い。俺にとっても死活問題に繋がってくる訳だしね。

でも一応は抗議なんぞしてみる。

「俺にも予定の一つくらいあるんだからな！」

「どうせ大宅の婆さんとの将棋だろ？」

モオやだこんな神様。多分俺が一局指す度にこてんばんにやられてるって事も把握済みなんだろうな。

まあ、こういう風にして気持ちを鍛えられ続けたお陰で体の方も馴れ初めの頃よりは結構丈夫になってる、と思う。でなきや甚三の脹脛の白さに刺激されて腰の奥が疼いたりはしないって。

「どうせの一局なら、吾と指す方が心地良からう？」

小鼻をひくつかせ、軽く唇を舐めて湿して甚三が笑いかける。まあ、その為にこいつは待ってた訳だし。

「盤は有るんだよな？」

俺の問いに甚三は無言で横たわり襦袢の前をくつつろげる。胸から腹にかけて紅の線で描かれた枡目。胸板はやや弾み気味に上下し、幼げに見える茎は紅色に染まりつつ立ち上がり雫をこぼしている。

これが普通の関係ならまあ世を忍ぶのは必須だろう。どう見て

も小学生の少年とそれなりの歳の男。でも俺と甚三の場合究極の言い訳が一応は存在する。

俺の一族が染色と調剤を生業にする古桜樹の護り人であり、甚三がその護られている古木の精の仮の姿と言う言い訳が。実際の年齢の問題で言ったら俺の方が甚三より二百歳は年下なのだから世法に触れる訳がないだろう、と言う屈理屈をこねるのは可能だ。うん、理屈なら。

でも人間には理性ってもんがあるしそれなりの常識もあるからはずつきり言つて最初は俺も悩んだ。それに対して甚三はきつちり申し開きの余白をくれ：それ以降俺は悩んでいない。そう言う迷いが生じると総てが台無しになってしまふと判ったし、何より甚三の気遣いが有り難かったから。

「お前が盤なのは良いけどさ、駒は誰が置くのよ？」

「祐に決まっているだろう？」

「投了を決めるのは？」

「それも祐」

「駒はどう置いても良い訳ね」

「……ああ」

それじゃあとと言うので駒を並べる。駒と言っても桜の太い枝を乾燥させて輪切りにし、字を書き込んだものだ。百年前に行われた甚三の本体枝打ちの副産物と言う訳。その枝で造った別のお道具もあるけど、今日は遣わない。甚三にしてみると体に馴染む良い道具なんだろうけど俺が嫌だ。だって俺が自前の道具で甚三を達かせない事にはこの儀は成り立たないのだし。

駒を並べ終わると先ず一通りみて確認。かなりあられもない景色だよな。人体ケーキならぬ人体将棋盤だなんて。しかも淫靡な催浮効果もある体臭付き。これで平静になれという方が無理かも知れない。でもまだ我慢。体臭がこなれて馴染んでいないから。そんじやま、行きますか。

先手は俺って事だからとりあえず普通に指してみる。それだけでも良い反応を示してくれるんだから全く始末が悪い。甚三にしてみれば元々自分の本体の一部だったもので肌をなぞられるんだから自分の手で肌を愛撫している様なもんか。ま、感じてくれた方が俺の手間も省けて良いんですけど？

「吾の、手は」

良いね、その擦れ声。最初の頃はこの声を聞くまでにえらく遠

回りしたんだよな。俺だってほら、歳が歳だからサクランボだった訳だし。だから最初の頃は俺が拗ねた。甚三が俺の体に教えこんでくれなきやヤダって。そしたら返しが奮ってたね。

『貴様が達っても吾は染まらぬわ、バカモノ』

お説ごもつとも。俺の一族が何故甚三の本体を護っているかと言えば、染色と調剤の材料を得たいからであって、染める際の鮮やかな色合いを得る為には桜の精である甚三を達かせてその身を綺麗な紅に染め上げないといけないのだ。

その為の手管ってのは当主毎に違っている必要があるそうだけど、それは表向きの理由。甚三が色々な愛撫を楽しみたいというのが真実。だから俺も自習に励んだ。今年はネタ切れかとも思ってたんだけど甚三の方からネタを振って貰えたのでかなりラッ

キーかも。

さて、甚三の駒を動かすのに普通に指を使うのは芸が無い。だから。

「あ、ひっ」

唇と舌で駒を運ぶ事にする。目算が狂ってしつとりと濡れた肌を舐めてしまったり、肌の匂いを嗅いで返しに鼻息で肌を撫でるのは御愛橋と言う奴だ。実は俺にとってもこれは焦らしだったりする。出来れば一足飛びに甚三の茎を舐りたいし臍辺りだってしつかり嘗め尽くしたい。余りに芳しい香りなのだから。先走りのせいで下帯の締め心地も悪いし甚三の気配で溢れていた部屋の匂いも変わってしまいそうだし。

「たす…も…やあ」

甚三の軀は耳染から爪先まで完全に朱に染まっている。完全に色が出切った感じか。俺はもう少し余裕あるけど、もう注いじまっつて大丈夫なんかな？折角の紅が中途半端に白く濁るのは不本意だし。

「ハッキリ言いなつて」

敢えて問う。返しは肌の上の駒を弾き飛ばしての力一杯の抱きつき。そして、言葉にならない吐息。だから俺も言葉を挟まず下帯を解き先走りに塗れた自分の茎を握り締めて一息に突く。そこから後は抜く間を惜しんで甚三の色を鮮やかにする為だけにまぐわい合う。五回注いだまでは確かに覚えているがその後は只突き上げていた名残が腰に残っているだけでとんと記憶が無い。どうやら甚三の香りで強かに酩酊して只本能のままに肌を重ねて

いたらしい。

その甲斐あって甚三の紅を綺麗に引き出す事に今年も成功した様だ。甚三の纏っていた襦袢は胡粉色から珊瑚色に、甚三の精の散った痕は韓紅も鮮やかに野趣溢れる春の香りを漂わせている。

ふと傍らの文机を見るとまだほんのりと湯気を立てている桜茶の腕が置いてあった。護っているつもりでもどこかで見守られてしまっているのかと、嬉しくもあり気恥ずかしくもあり。ああまで可愛く鳴くのに俺より強いだなんて、ずるいな。

とりあえず起き上がって身支度を整え、甚三の本体の根元に赴き樹皮を少し剥いて噛み締め、晒し手拭に唾を吐き出してみる。

広がる鮮やかな朱鷺色にもう少し鳴かせるんだったかと不埒な
気持ちに誘われる。我ながら困ったものだ。役割に馴染み過ぎた
かな？

《分を忘れてそれ以上調子に乗るのなら》

脳内に響く無邪気な邪気声。

《この皮を口で剥く事を作法に加えるが、どうじゃ？》

そいつはご勘弁！若茎の皮なら喜んで口で剥くけど。

初出

CUTE ANTHOLOGY 春

シヨタオンリーイベントアンソロジー

二〇〇九年三月二二日初版

脱稿・二〇〇九年某日

後書き：省略します。

奥付

【十八禁シヨタ小説】

はる、そめて

【二〇一六年五月一〇日初版】

ぶどううり・くすこ個人誌

xqo_gm@yahoo.co.jp

※本作は無償頒布品です。

【18禁シヨタ小説】

はる、そめて

<http://p.booklog.jp/book/106917>

著者：ぶどううり・くすこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/xqo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106917>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106917>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ